

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

## 語法研究 : A voice says考

著者	木内 修
著者別名	KIUCHI Osamu
雑誌名	東洋大学大学院紀要
号	54
ページ	243-250
発行年	2017
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00009709/">http://id.nii.ac.jp/1060/00009709/</a>

## 語法研究：A voice says 考

文学研究科英文学専攻博士後期課程満期退学

木内 修

英語を読んでいると、ときおり次のような表現に出くわすことがあります。

- (1) A voice said, “That’s it. Come ahead.” (Prey by Michael Crichton)  
(ある声が、「そうそう、前に進め」と言った)

別段、意味は取れるし、自然に英文を追う目は左から右へと流れます。しかし、ひとたび論理的に考えると、あることに気づくことでしょう。日本語表現では不自然な「ある声と言った」<sup>1)</sup>とは何か。そう、発話動詞である say の主語が人間ではなく、人間から発する声になっているのです。しかし、指示対象のずれ込みということは、言語の世界ではよくあることです。たとえば、I read Dickens yesterday. という平凡な英文でも、ちょっと考えてみれば作家のディケンズそれ自体を読むことは出来ず、私たちはディケンズが書いた作品を読んでいることに気づきます。このような作家と作品名の関係とか容器と中身の関係（鍋を食べる）、つまり隣接関係に基づく意味の移動現象はメトニミー（metonymy：換喩）と呼ばれているものです。すると（1）の英文も指示対象が人間と人間の発した声にすり替わっているので、メトニミーと考えることが出来ます。そもそも人は分類したり名づけたりすることで安心する動物ですから、何も理解は進んでいないにもかかわらず、分かった気になります。発信型を目指して英語教育では何十年も前から声高に語られ、学校の授業で小説など読んでいるから英語が出来るようにならないのだと短絡的な結論が蔓延しているのが現実です。そもそも問題にすべきは教材を何にするのかではなく、それをどのように扱うかなのです。つまり、英語で書かれたものをただ和訳し、知らない文法や語法などを暗記して、やった気になり安心してしまうのが問題なわけです。この事例に関して語れば、なぜ、このような場面でメトニミーを使うのかというさらに一步踏み込んだ問い掛けが重要であり、英語母語話者がどんな感覚でこのような表現法を選択しているのかをまず納得し、そのあとで真似をしながら習得していくことを目指すべきなのです。

本小論では自家製コーパスを利用して、まず voice と said のAND 検索を実行し、考察を始めます。さらに、このような表現が用いられる文脈を明示しその結果を眺めてみることで、ある一定のパターンがあることを明らかにします。また、英語力上級を目指すような大学生や一般の中級の英語学習者（英検の2級程度）を読者として想定し語る形式を採用した記述的語法研究です。よって、文体も読み易さを優先するために「です・ます」体を採用しました。

まず、よくある場面は声の主が誰なのかその段階では分からないときです。

(2) A voice behind him said, “Still planning to get rich, McGregor?” Jamie turned. It was Pederson, ....

(*Master of the Game* by Sidney Sheldon)

(彼の背後から声が聞こえた「相変わらず金持ちになる計画をしているね、マクレガー」ジェイミーが振り返ると、それはペダーソンだった・・・)

視覚情報は頭の目のついている側、つまり前面から来るものなので、背後は音声のみが頼りになる場面です。この「背後から」というbehindはこの a voice says のパタンの時にはよく見かける語です。

(3) のように視界の外から発信される情報は背後だけではなく頭上も同じく視覚情報の欠落があります。

(3) “I wouldn’t go that way if I were you,” a voice said from somewhere overhead.

(*Keeper of Myths (Secrets of Valhalla)* by Jasmine Richards)

(「もし私があなただったら、あちらには行かない」とどこか頭上で声がした)

つまり、声の発信場所が頭上で視界の外であるために、声が聞こえた瞬間は、発話者を確定できないか、誰が発話したのかということより発話内容に意識が向いたために、情報の出所を単に a voiceとする表現となっているのです。

近づいてくる足音にも気づかない状況設定も視界の外、または意識の外からの音声情報の獲得になります。

(4) He lay on the slimy deck, breathing so loudly he didn’t hear the approaching footsteps. Then a new wave of panic ripped through Sam as a hand gripped his shoulder and a voice said, “You are under arrest.”

(*Bones of the Sun God (Pyramid Hunters)* by Peter Vegas)

(泥だらけのデッキに横たわって大きな音を立てて呼吸していたので、近づいてくる足音が

聞こえなかった。サムは肩に手をやられ、「お前を逮捕する」という声が聞こえたとき、新しい衝撃が彼を引き裂くように襲ってきた)

(5) のようなシーンでは、ノックの後で、ノックをした人物が不明であるために it で受けることでその場をしのいで yes, who is it? と返答する表現法と今回の発話の発信元が不明という発話時点の背景が類似しています。つまり、声だけが聞こえて姿かたちが描写できない場面なので、a voice が主語となっているのです。

(5) I walked upstairs to the third floor and knocked on his door. "It's open," a voice said.  
(*Rising Sun* by Michael Crichton)

(三階に歩いて上がって、彼の部屋のドアをノックした。「開いていますよ」と声がした)

また、視覚情報が欠落しているために話者の正体が捉えきれない場合は、(6) にあるような電話の場面でもよく見うけられるのです。

(6) The phone rang and then a voice on the other end said, "I told you not to call me."  
(*Damned Cold* by Kevin Lee Swaim)

(電話が鳴り、すると電話の向こうの声が、「私に電話をするなど言いましたよね」と言ってきた)

この電話の場合、相手が名乗るまでは正体不明なので、その声の主としての"a voice" が主語になるこの表現が妥当であると感じるでしょう。

つぎの事例は同格の文法構造を利用しつつ関係代名詞節で情報の補足をしているものです。情報の追加について考えると、視覚情報以外は可能であることは論理的に考えて容易に理解できることでしょう。

(7) A voice on the other end of the line, one that did not sound like Fayed, said, "We will get you a vest."

(*Every Deadly Kiss (The Bowers Files)* by Steven James.)

(電話の向こう側の声はフレッドのような声ではなかったが、「あなたにベストを買ってあげよう」と言っていた)

今まで提示した事例はすべて "a voice" と不定冠詞のみが付いたものでした。確かにコー

パスの検索結果は、“a voice” が群を抜いて多い事例ですが、これから示す事例のように voice に修飾語が付くことはそれほど珍しくはありません。

(8) One of the guards knocked, a muffled voice said, “Enter,” and the guards eased the heavy door open at the end of the hall.

(*Ash and Quill (The Great Library)* by Rachel Caine)

(守衛の一人がノックをし、こもった声で「入りなさい」と言い、守衛たちは廊下の奥の重たい扉をそっと開けた)

さらに、現代においては人間でなくても声を出すものがあります。(9) や (10) のように留守番電話の録音された音声の特徴がどうなのか、さらには、初めから人間としては存在しない人間の声に似せた電子音という聴覚情報も、その特徴づけを主語の voice に修飾語として付ける事例もあります。

(9) A male voice said, “Leave your message at the beep.”

(*Disclosure* by Michael Crichton)

(ある男性の声で「信号音の所からメッセージを残してください」と言った)

(10) An electronic voice said, “Please enter your access code.”

(*The Lost World* by Michael Crichton)

(電子音は「あなたのアクセスコードを入力してください」と言った)

実は (1) の例文の後続する部分を明示すると (11) のようになっています。

(11) A voice said, “That’s it. Come ahead.” I opened my eyes.

(*Prey* by Michael Crichton)

暗がりの中や目を閉じた状態では、誰が声を出している人なのかを判断できない場合が出てくるので、その人物の描写は聴覚情報に基づく声の特徴に特化するものになるのは当然の帰結のように思われます。

(12) の事例では、Looking in that direction と表現されていることは、それ以前はその人の視線は別の方向に向けられていたので、声を聞いたその瞬間は声の主は捉えてはいません。同様に (13) も声がした後に looked up と視線を変える表現があり、なおかつ寝不足で頭がはっきりしない状態にあったためか、“voice” の詳細な記述はなされていない。ここで

の“voice”と“face”に対する、つまりは視覚と聴覚の情報の差も興味深いところです。

- (12) “Let him pass!” a squeaky voice called from the direction of the bamboo wall.  
Looking in that direction, Nick saw silhouettes.

(*Kingdom Keepers* by Ridley Pearson)

(「彼を通してあげて」と竹の壁の方から軋んだような声でした。その方を見てみると、ニッケはシルエットを目にした。)

- (13) “I’m sorry,” a voice said. He looked up, his head foggy with sleep. A familiar and welcome face smiled down at him.

(*Bring Her Home* by David Bell)

(「お気の毒に」と声でした。彼が上を見たが、眠たくて頭がぼんやりとしていた。馴染みのある、有難い顔が彼に微笑んだ)

(14) は先行文脈が目を開くことが出来ないということが明示されているので、顔ではなく声で発話者が誰なのかを判断する場面です。よって、(11) の事例と同類の状況であることが分かります。

- (14) He tried to open his eyes, but just like the struggle to make a sound, the struggle to open his eyes led to failure. (中略)

“Quit faking it,” a voice said. “Open your eyes.” (*Bring Her Home* by David Bell)

(彼は目を開けようとしたが、音を立てようとしてもがくように、目を開く試みは失敗に終わった。(中略)「誤魔化すのは、やめなさい。目を開くのだ」と声が聞こえた)

今まで見てきた事例は voice に不定冠詞が付くもののみでしたが、ここからは不定冠詞以外の事例を観察していきます。

(15) の事例では、電話が鳴り、受話器を取り、相手の声を聞く前にこちらから電話をかけた相手を確認するために聞き出すシーンで出てきた相手の声であり、またさらに、ここでは伝達動詞の前に発話内容が引用符で示されているので、「その問題となっている声の主は」と定冠詞がついています。

- (15) When the phone rang late that night, Jude snatched it up. “Emma?” she said.

“Jude, it’s Harry,” the voice said. “Sorry to disturb you, but I’m worried about Emma.” (*The Child* by Fiona Barton)

(あの晩の遅くに電話がなり、ジュードは受話器をさっと取った。「エマなの」と彼女が言った。「ジュード、ハリーだよ」とその声の主は言った。「邪魔して悪いが、エマが心配なんだ」)

(16) では、先行する a voice を踏まえてそれとは別の声というものなので、another が付いています。さらにそれ以上にこの事例の興味深いところは述語動詞です。メトニミーとしての発話者の意味で使用されるvoiceを主語に支える述語動詞の大半は確かに say です。しかし、実は音声と関連できるものならば、say 以外でも他に“ask”、“answer”そして“tell”などが可能で、一気にコーパスのKWIC (Key Word In Context) の形式のデータ<sup>2</sup>を眺めることで文法書や辞書では気づかず習得が出来なかった英語の感覚を掴めるようになるのです。(17) はかなり詳細な情報を付加した構造となっていて述語動詞は answer が使用されています。また、(18) は二重目的語構文で述語動詞に tell が使用されている事例で、これもコーパスや電子辞書の例文検索などを利用すると容易に見つかる事例です。

(16) “Did you get the signet ring?” another voice asked.

(*The Emperor’s Ostrich* by Julie Berry)

(「印鑑付きの指輪を手に入れたんだよね」と他の声が尋ねた。)

(17) ...and when she returned home, she dialed it first. An airy, thin female voice answered the phone. (*The Lake and the Lost Girl: A Novel* by Jacquelyn Vincenta)

(・・・そして彼女は家に戻ると、まず電話を掛けた。か細い女性の声が電話に出た)

(18) Kristin sat in the front seat and he was in the back with the barrel of the gun pointed at her head. His cold, quiet voice told Ev where to go.

(*Predator* by Cornwell Patricia)

(クリスティンは前部座席に座っていた。彼は後部座席で彼女の頭に銃身を向けていた。彼は冷たい静かな声でイブにどこに行くべきかを命令した)

英語の知識のインプットの際にも、つねに発信のことを意識して、どのような場面でどのような表現が適切なのかを考える重要性も感じ取れたのではないかと思います。学習者が陥りがちな、一見、論理的に破綻している表現が出てきた場合でも、分類して名づけることで問題解決したと安心するのではなく、さらに問いを重ねることで、納得する動機づけが見えるようになるのです。このような謎解きが言語学の醍醐味でもあるのです。

A voice + says 構文は、決して文芸的な技巧を駆使した文体ではなく、発話された状況でいたって自然であり、効果的で有意義な表現法であることについて実例を提示し、なおかつその記述・説明を試みました。当表現法の特徴を以下のようにまとめることにします。

A voice says の構造は発話者とその声をすり替えることを可能にしている人間の認知能力であるメトニミーによって成立している。このメトニミーを使用する背景はその声の主が様々な理由で目に見えない状況であります。この目に見えない状況とは発話者が背後や頭上と言った視界の外、または聴者が目を閉じているといった視覚情報が遮断されている時です。また、声のみを利用して情報を伝達する電話やインターフォンなどの通信機器の場合が非常に多いということがこの表現法の存在理由のひとつであることが明らかになりました。

---

<sup>1</sup> 「ある声が聞こえた」という表現は日本語としても自然である。

<sup>2</sup> 筆者の2017年度コーパス（2017年に出版された書籍で1000万語強）では、a voice の直後に生起する語: のべ語数

が455であり、異なり語数 147 であった。そして述語動詞の場合は、[22 : said、2 : say、12 : says] が群を抜いて多く、それに続いて多く生起するのは [7 : whispered、2 : whispering] である。そして [1 : speaking、1 : speaks、3 : spoke] と [1 : ask、1 : asked、3 : asks] が偶然同じ生起数であった。



# **A study of English usage: *A voice says* constructions**

KIUCHI, Osamu

This squib analyzes the usage of *a voice says* constructions based on homemade corpus data by focusing on the contents that arises from this construction. This expression is based upon metonymy, which is used as a substitute for something else with which it is closely connected. A motivation for using this construction is when we cannot identify the speaker due to lack of information on visual sensation, under such expressions as *a voice from behind* or *a voice on the telephone*.